

二十世紀の意味における宮沢賢治の意味の一側面

栗原 敦

1、はじめに——アイデンティティと共生

賢治の一生の中のたった二年半弱の下根子の生活がなかったら、人々の心の中の宮沢賢治像はまったく違ったものになってしまうであろう。

小沢俊郎の「けわしく暗い——農村へ——」(「四次元」二〇〇号、一九六八・二)の冒頭を飾る印象深い一文である。それまでの伝記的研究をまとめ、宮沢賢治がはじめから後年語られるような「農聖」だったわけではないことを踏まえた上で、種々の経緯を通じて農村との関わりを深め、使命感を強めていった姿を確認した論文だが、大正十年生まれの小沢は、宮沢賢治を敬愛

する念を抱きつつ、恩田逸夫と並んで、客観的に「近代文学研究の方法で賢治を扱った先駆者」⁽¹⁾だったが、多くの「人々」が賢治を受容する際の心の機微にふれるものであった。

少し後、「日本文学研究資料叢書 高村光太郎・宮沢賢治」(有精堂出版、一九七三・一〇)の編者「解説」で工藤信彦は賢治研究の現状を展望するに際し、「一見して容易に認めうる特色の一つ」を、「一般読者層——文学研究の上では素人である賢治読者のレポートが実に多いという現象がある。」と指摘した。賢治の多面性にも理由はあるうが、それよりも「どの作品にも漲るあの非日常的で多様な一種の宇宙感に満ちた不可思議性が、賢治の日常の観察や実践という行為の裏付けをもっている所に、一般読者の研究のもつポピュラリティーの源泉」があるとして、「作品研究よりも人間探求に、一般読者の研究志向を読みとり

うるのは当然のことと言つてよい。」と見渡していた。

いずれも、宮沢賢治の紹介期（研究の始発以前）以来、現在に至るまで変わることなくつづく受容と評価の課題を示す重要な観点の指摘だが、根源的には、宮沢賢治の全体像がたえずわれわれに問いかけてくるものへの自覚の表明でもある。知的に高度な専門のアプローチを導く側面と、困難な生活の現場に直かに関わりとうとする苦闘と、生き生きとした共感・共生の喜びとが折り重なりつつ存在するところ、生涯の道程と文学作品をはじめとする表現行為がその実践的過程として融合する現場、そここそ、私たちが目を逸らすことのできない焦点なのである。

長田弘が遺したエッセイ集『本に語らせよ』（幻戯書房、二〇一五・五）に「アイデンティティとは」の小文が収録されている。長田は「二度の世界大戦をはじめとする二十世紀の戦争と戦後の経験がもたらしつづけたのは、それまでの世界の秩序をつくったさまざまな概念の瓦解です。新たに人びとを結びなおす新しい概念が求められた」二十世紀後半の、「もつとも火急の問題」として、「アイデンティティ・クライシス（アイデンティティの危機）」を介して「アイデンティティ」の問題が自覚されるようになったとはじめて、この概念を認知させた精神分析家エリク・エリクソンを取り上げ、その思想、そして彼の人生を評伝によつて素描し、いわばアイデンティティの「欠如」から「より普遍的なアイデンティティ」を求め続けたエリクソンの肖像を描き出す。一方、「根っからのアイルランド人でありな

がら」、パリに「流謫者のように生きた劇作家」サミュエル・ベケットを、対照的にアイデンティティの「過剰」に苦しんだ人物として配して、それぞれの認識と思索の行き着いたところを集約して、「アイデンティティ」という概念は、いまなお個人と社会を質すキイ・ワード」だと記して、両者のことばを次の様に併記して、結びとっていた。

アイデンティティとは——「他者なしにあり得ない自己」（エリクソン）。「共生」（ベケット）。

エリクソンより六歳、ベケットより十歳の年長、しかも若くして二十世紀の前半に生涯を終えた賢治だが、その生涯を近代日本社会と個人の関わりを質すアイデンティティ、そして「他者」と「共生」の概念との関わりという観点から問いなおすことは、意義深いことである。

宮沢賢治にアイデンティティ・クライシス（アイデンティティの危機）と呼ぶべき体験があったらどうか。それ以前に、前提であるべきアイデンティティの確立はいつ、どのような姿を呈していたのだろうか。この経緯については、拙稿「宮沢賢治の仏教とはどのようなものであったか（上）」——「法華経」との出会いまで——（『実践国文学』八〇号、二〇一一・一〇）で詳しく取り上げたが、父宮沢政次郎は、その父喜助が分家して小さな資金と市がけからはじめた家業を十代の頃から助けて、役

所への掛け合いを代わって行い、東京をはじめ各地に仕入れにも出るといふ形で、新しい時代の積極的な企業家へと成長してゆく資質を身につけた。一方で自身の健康の不調と伝来の浄土教の無常観や罪悪感から他力易行に入り、やがて易行ならざる難信の行であることに気づき、他力・自力の相違はどこにあるか、無上仏と阿弥陀仏との関係はどうなのかなどの問題に逢着し、宗門の先覚者のもとを訪ねて解釈を問うなどの長い時を過ごした（昭和二十二年十月十五日付小倉豊文あて書簡⁽²⁾）。その間に清沢満之、その門下晚島敏らいわゆる浄土真宗改革派をはじめ、諸派の学僧らを中心とした新時代の仏教者たちとの交流を持つことになった。

それは、仏教の近代化の流れからいえば、廃仏毀釈からの立ち直りを求める仏教再生運動をへて、家や講や共同体のもとの旧来の信仰を越えて個の自覚を生き生きと更新させる明治三十年代からの新仏教運動の流れを浴びたものであって、大沢温泉夏期仏教講習会など種々の講話に、少年期の息子賢治を参加させるといふ環境を用意したのであった。

いま、これを宮沢賢治のアイデンティティの形成の場に意味付ければ、そのレベルと拡がりには、ベケットのアイルランドにもなぞらえられるべき思想的、宗教的アイデンティティの「過剰」として認めることができようか⁽³⁾。

一方で、商業者として、実質的には父喜助よりも家業の中心の担い手となっていた政次郎であっても、旧来の家意識と、

明治天皇制国家の民法体制の編成がもたらす家督観のもとでは、戸主喜助の威光は簡単には払いのけられるものではなく、とりわけ、長子に家督（家業の質・古着商、およびその責任）を継がせるといふ通念は、進学問題となって賢治の上にのしかかった。義務教育を終えたら商家に奉公させ、実地に商売の訓練を受けさせて家業を継がせるのが当然だという喜助の考えである。これによって小学校卒業に際しても、すでに上級学校への進学は反対されたが、父政次郎のとりなしで、中学校だけということまで許された経緯があり、中学校以後の進学の可能性は閉ざされていると思う外はなかったのである。喜助の考えは、その世代の商家では決して彼のみの特有のものではなく、賢治にとつては、同じ盛岡中学校の二学年先輩で、母方の親族の橋本英之助の例も、自身の運命に重ねられていた。盛岡中学校の卒業生ほとんどが上級学校への進学を目指すなかで、英之助は父の早世のため、卒業を待つて家業の呉服店を継ぎ、祖父の橋本喜助を襲名することが決まっており、その卒業に際して、賢治は励ましの短歌を献呈して、英之助の思いに共感を示していた⁽⁴⁾。

早熟にして「過剰」なまでの思想的、宗教的アイデンティティをすでに形成していた少年の賢治にとって、具体的な進路の閉塞・選択可能性の欠如は、過剰な反抗心として「操行」の評価の低さと、学年が進むに従っての学業成績の低下となつてあらわれた。

後年、盛岡高等農林学校の三年次、賢治は特待生、旗手だったが、この学年末に一学年下の友人保阪嘉内が除名処分を受ける事件が起こる。この事件の意義については、拙稿「保阪嘉内『社会と自分』と宮沢賢治『大礼服の例外的効果』の間」(資料と研究)第十三輯、山梨県立文学館、二〇〇八(三)で検討したので参照願いたい。が、保阪もまた祖父の代に旧来の曹洞宗から教派神道一派である禊教に改宗した家柄を背景に持つという意味で、すでに近代の個人として改めて選取り直された宗教的環境を前提とする次元に立っていたひとりであった。賢治は除名された保阪を慰め、励まし、また論す手紙のなかで「あなたは幾分虚無的なものと誤解された事が第一の原因な様です。事実あなたはさうらしい、けれども誰とでも一度虚無思想に洗礼されなくて本当に一切を肯定する事ができませんか。」(推定、大正七・三・一四前後)と記している。ここに見られる、「誰とでも一度虚無思想に洗礼されなくて」のことは、おそらく彼自身の中学校卒業前後の経験をふまえて記されたものであったろう。

盛岡中学校時代の進路を巡る宮沢賢治のアイデンティティ・クライシスは、大正三年秋の時期を同じくする『漢和対照 妙法蓮華経』との出会いと、父による盛岡高等農林学校への受験許可とによって克服されることになる。

この時期に新生の思いとともに再び立て直された思想的、宗教的アイデンティティが、現実の農村を実践的フィールドに見

定めて着地するまでには、小沢が指摘したようにまだしばらくの道のりを要したが、いまは先を急ぐことにしたい。

2、フィールドとしての農村の認識

大正十四年九月二十一日付で弘前歩兵聯隊第七中隊第一班に一年志願兵として入営していた弟清六にあてて、宮沢賢治は「先頃」山田野の演習場に見舞ったときの愉しさをこう書き送った。

「前略」あの夕方の黒松の生えた宮庭の草原で、ほかの面会人たちが重箱を開いて笑ったりするのを楽しく眺め、われわれもうすぐ濁った赤酒を飲み、柔らかな風を味ひうるんだ雲を見ながら何となく談してゐた寂かな愉悦はいまだに頭から離れません。いろいろな暗い思想を太陽の下でみんな汗といっしょに昇華させたそのあとのあんな愉しさはわたくしもまた知つてゐます。われわれは楽しく正しく進まうではありませんか。苦痛を享楽できる人はほんたうの詩人です。もし風や光のなかに自分を忘れ世界がじぶんの庭になり、あるいは惚として銀河系全体をひとりのじぶんだと感ずるときはたのしいことではありませんか。〔後略〕

賢治の、「愉悦」・「愉しさ」を語る筆の弾みやそれを支える、

「風や光」、そして「世界がじぶんの庭になり」、「惚として銀河系全体をひとりのじぶんだと感ずる」感受性や宇宙観、真実の宇宙は明るく楽しいのだ（まことはたのしくあかるいのだ）『春と修羅』所収「青森挽歌」という至高の自然体験や宇宙感覚を宗教的理念に重なるあり方を示して、読む者に忘れがたい表現のひとつになっている。ここでは、賢治が形成したアイデンティティにおける自己が向き合っているのは、先ず第一に自然や宇宙であって、それとの融合や合一としての「共生」が信じられていたことをよく表している。

とはいえ、もちろん、宗教的理念や自然・宇宙との融合の喜びや愉しさだけを引き出して済ませるわけにはいかない。手紙の冒頭には、間近にひかえた「大演習でも一度熱く燃えなければならぬ」清六を労ることばが記されていたとおり、この年の陸軍大演習は、仙台―一関間で十月十九日から二十三日まで実施された。終了後（二十三日の午後以降）に仙台の阿部写真館で清六と賢治二人で写した記念写真が残されている。厳しい大演習による清六の労苦を癒すことはもちろんだが、この機会は、おそらくは、翌年三月の除隊を待つて清六が家業を新しくして家に残り、賢治は下根子桜にある宮沢家の別宅を改装して家を出て農村活動に入ることになる、その相談を一層深めるものとなったに違いない。十二月一日付書簡の「仕事の計画はいかにも実務的ではつきりしてゐてひじやうに賛成です。」「お父さんも大へんよろこんでゐます。」という文面にもその事情は

うかがえる。家を巡る心情としては、引き続き記された「恐らくきみはその新鮮な熱情と透明な企画とでわれわれのしばらく寂れた家（わたくしの勝手から起った）をはなばなしく楽しくしてくれるだらうとおもひます。」ににじみ出ており、それが、単純に、明るく、夢のようにのみ思い描かれていたものではないことが認められる⁶⁾。

『春と修羅 第二集』所収の詩篇、「一九二五、一〇、二五、」の日付を付された「告別」に、「云はなかつたが、おれは四月はもう学校に居ないのだ」の決意と「恐らく暗くけはしいみちをあるくだらう」の覚悟が記されているように、賢治自身、実際に別宅での生活に入った四月四日付の森佐一あて書簡には、「もう厭でもなんでも村で働かなければならぬりました。」という言い回しで、農村に入ることが、止むに止まれぬ選択でもあったことを語っている。週れば、大正十四年春のころから来春には教師を辞めて「本当の百姓」になる（四月十三日付、杉山芳松あて。以下六月には、保阪嘉内、斎藤貞一あても）意向を漏らしているのであって、関東大震災とその後の復興景気、都会と農村の格差の増大、引き続く不況によって階層分解にさらされる東北農村の深刻な状況、このような経過に対する認識は、農学校教諭としての生活を通じて、現実的に深められていったものである。『春と修羅 第一集』に収録された詩篇「永訣の朝」に記された宗教的利他行への願いが一般的、抽象的な次元を越えて着地する時を迎えたのだが、農村生活を明るく豊

かなものにしつたいという希望は高く掲げられるにしても、實際が「暗くけはしいみち」であることは予感されていたに違いない。

下根子桜の宮沢家別宅を改装し、県立学校の教壇の人という立場を離脱したひとりの農民としてははじめた羅須地人協会活動は、昭和三年夏の発病によつて中断を余儀なくされる。一旦は回復の兆しを見て桜の協会に戻つた模様だが、程なく再び病臥の人となつて実家で両親や弟の看護を受ける身となつた。長い病臥のち、昭和五年夏に「全快」し、闘病中に交渉が始まつた東北砕石工場の技師としての活動を開始する。ひとりの農民から技師という工場の勤め人に転じ、セールズ活動としては商業従事者の位置に立つことに対する農民からの眼差しを、自身の農民に対する裏切りのように感じたりすることもあつた。実体は、工場の経営基盤の脆弱さのゆえに、給与は肥料用石灰の現物支給であつたり、父政次郎に工場主から資金提供の要請があつたりする程で、決して手の白いサラリーマンなどではなかつたのだが。そして、昭和六年九月に出張先の東京で再び病に倒れ、死を覚悟して遺書も認めるが、父の厳命により帰郷、二年後の逝去までの最後の闘病生活を送るといふのが晩年の素描となる。

昭和六年の上京中から最後の闘病に入る頃に使われていた手帳のひとつが「雨ニモマケズ手帳」だが、その四十一頁以降に「疾すでに／治するに近し」とはじめられた覚え書きがあり、

健康を回復した後の生活をどう律して行くかの方針を次のように記している。

蔽に

日課を定め

法を先とし

父母を次とし

近隣を三とし

農村を

最後の目標として

只猛進せよ

「法」とはタルマ＝仏法としての真理であり、「農村」の部分は一且「社会」と書いて棒線で抹消して直ぐ下に「農村を」と記していた。

実際にはこの後、再びの健康を取り戻すことはかなわず、二年近い病臥の末に世を去ることになるのだが、「農村を／最後の目標として／猛進」するという願いは保たれた。時代の現実に対して、自身の活動のフィールドを農村に求め続けるという意志は終生変わらなかつたのである。この認識と行動の実状はさらに深く掘り下げられるべきであろう。

その際、重要な観点のひとつとして、かつて石堂清倫が「詩人の言語」（『梨の花通信』二二二号、九七・二^⑥）で記した事柄が

忘れられない。

明治三十七（一九〇四）年生まれの石堂は賢治より八歳年下だが、小学五年生のとき暁烏敏の明達寺の日曜学校に通ったことがあり、金沢の第四高等学校在学中には暁烏の年若い盟友である藤原鉄乗や高光大船と交流を持ち、大正十年には明達寺の夏期仏教講習会に参加している（中野重治も参加している）。こういった自身の経験もふまえて、「宗教的関心あるいは宗教的言語は、ほかに伝統的な知識や手段がないため、社会解放あるいは社会改造のイデオロギーの役割をはたす一面があった」とし、アントニオ・グラムシの『獄中ノート』に見られる理論的考察を援用しつつ、「異言語相互翻訳可能性」の概念を介して、宗教的言語と社会解放のための言語、また詩的言語との間にも、「本質的共通性をさぐることができるはずである。」とのべていた。

石堂は、昭和二（一九二七）年十一月から三年三月の三・一五事件で検挙されるまで、「無産者新聞」中央の「編集局の一員」として、各地の支局通信の管理もしていたが、「岩手の花巻支局員は有能かつ熱心なひとで、一カ月に二回は通信をおくってきました」として、そのなかで賢治について二回の報告があったことを証言してくれた（一九九六・一〇・二九消印および、一一・二三付、一九九七・四消印、栗原あて書信）。内容の基本は、賢治の労働支部への協力として聞き書きで知られていた事実にも重なるが、労働党と「無産者新聞」、そして中央編集

局（さらには当時の日本共産党との関係も含めて）、結ばれていた網の目のより具体的な実状が描き出せるようになったことが重要であり、要点は『新校本 宮澤賢治全集』第十六卷（下）年譜篇の「昭和二年秋（二月頃から三年二月頃にかけて）（推定）」の項に注として紹介した。

当時非合法下にあった日本共産党の指導を受けながら、合法政党としての労働農民党（労働党）その他青年団体、文化団体があり、また、石堂によれば「無産者新聞」は日本共産党の合法機関誌の意味を担って刊行されていたものという。宮沢の羅須地人協会活動と、平行して行われた労働支部への協力の意義、そして、運動体としての性格の違いの評価については十分な注意が必要である⁷⁾。

3、宮沢賢治の肖像

大正十五年三月に花巻農学校を退職して、改装した別宅を拠点に農村活動に入った宮沢賢治の思想的、理論的根拠は、草稿として残された「農民芸術概論」によってうかがうことができるばかりである。草稿は昭和二十年八月の空襲による延焼で全て焼失したが、「序論」・「結論」を含む十章よりなる論考全体の目次に相当する「農民芸術概論」、全十章の各論として敷衍するための細目に相当する「農民芸術概論綱要」、序論に続く各論の冒頭「農民芸術の興隆」の詳細な条項の三種類が戦前の

十字屋書店版全集に収録されて今に伝わっている。

「序論」部分に「自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する」「新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある」「正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである」といったことばがあり、「結論」とされる部分の末尾には「畢竟ここには宮沢賢治一九二六年のその考があるのみである」と記されている。引用した「序論」のことばは、生命主義や全体主義に通ずるものと見なされがちだが、「銀河」にまで及ばせる眼差しを用意しているところに、地上の独善を相対化し、解体させてしまわないではいない。独自の担保が求められており、結論の末尾もまた、自己の「考」を、大きな過程のなかの当面する一局面として捉える言及になっていて、自己中心主義や一面的な功利主義・効率主義の限界を批判できる内省的自己言及の視点の担保を示している。「農民芸術の興隆」のなかには、「いま宗教家芸術家とは真善若しくは美を独占し販るものである」「われらに購うべき力もなく、またさるものを必要とせぬ」「芸術をもてあの灰色の労働を燃せ」「都人よ、来ってわれらに交じれ、世界よ、他意なきわれらを容れよ」などがあり、「農民芸術の諸主義」には「四次感覚は静芸術に流動を容る」、「農民芸術の産者」には「職業芸術家は一度亡びねばならぬ」「誰人もみな芸術家たる感受をなせ」、「農民芸術の批評」には「批評は当然社会意識以上に於てなきねばならぬ」、「農民芸術の総合」には「巨きな人生劇場

は時間の軸を移動して不滅の四次の芸術をなす」などが見られ、「農民芸術」に託した労働即芸術、芸術即人生の農業生活を裏付け、都市と農村の間にできた格差、農村の階層分解を迫る圧力が「都人」と農民である「われら」の間に生み出した境界、そこに生ずる排除や抑圧の関係を越えること、既存の制度や枠組みによって特権化されてしまったものを農民生活の場で更新できるものへと取り戻すこと、これらが、知識や技能をもった自身の農民との一体化を目指す、より大きな、宇宙的といったいい自覚の下で求められていたのだった。

けわしい現実に向かうものではあるが、「農民芸術概論」の草稿の文体は、積極的な呼びかけの姿勢によって、宣言風の高揚感とそれに伴う明るさを基調としている。農学校時代に試みた演劇は、自身の作、演出で上演され、彼自身プロデューサーでもあった。晩年の作とみられる「竜と詩人」にも「あしたの世界に叶ふべきまことと美との模型をつくりやがては世界をこれにかなはしむる予言者、／設計家」と主人公を呼ぶところがあつて、演出者や設計者たる者の立場への明瞭な意識があつたことを証明しているが、花巻農学校を退職して新しい境遇に入ろうとする自らの選択を、自身で客観的な肖像として差し出して見せることが試みられている。それが、この時期に撮影された二枚の肖像写真である。

一枚がオーバーを着て帽子を被り、うつむいて思索に耽りながら歩む姿。野を歩む芸術家の肖像を、歩みつつあるという動

きの一瞬として捉えさせたもの。賢治自身が写真師に歩みの動きを示して撮らせたという（撮影場所は、最近、農学校の冬の実習田の一角だと確定した。ペートーベンの肖像が踏まえられているという指摘があるが、その可能性は高いだろう）。もう一枚が、椅子に腰掛けた座像。固く指を組んで、斜め前をじつと見つめている。ひとりの農民であることを意図した服装で、けわしい前途を見つめる肖像である。

ともによく利用されて有名な写真だが、賢治自身がこの時期の自らの思想や信条を表出するために撮影させたものであって、「農民芸術」を生きる主体としての、ただの静止画ではない、現実の流動の中にある意志の主体としての肖像を差し出したのであった。

このような覚悟をもって羅須地人協会と名付けることになった農村運動のなかで交流があった労農党稗和支部の川村尚三に次の様な回想がある。名須川溢男による聞き書きだが、夏から秋にかけて（年は不明だが、昭和二年か）、賢治の希望で川村が「レニンの『国家と革命』を、賢治が「土壌学」などの交換教授のようなことを行った。区切りが付いたとき、賢治はお礼をいって、「この思想による革命は起らない」として「仏教にかえる」といったという（宮沢賢治について「岩手史学研究」五〇号、一九六七・一一）。

その頃書かれたと見られる賢治の詩篇草稿に「二〇五六（サキノハカといふ黒い花といっしよに）」がある。

サキノハカといふ黒い花といっしよに
革命がやがてやってくる

ブルジョアジーでもプロレタリアートでも

おほよそ卑怯な下等なやつらは

みんなひとりで日向へ出た輩のやうに

潰れて流れるその日が来る

やつてしまへやつてしまへ

酒を飲みたいために尤もらしい波瀾を起すやつも

じぶんだけで面白いことをしつたくして

人生が砂つ原だなんていふにせ教師も

いつでもきよろきよろひとと自分とくらべるやつらも

そいつらみんなをびしゃびしゃに叩きつけて

その中から卑怯な鬼どもを追ひ払へ

それをみんな魚や豚につかせてしまへ

はがねを鍛へるやうに新しい時代は新しい人間を鍛へる

紺いろした山地の稜をも砕け

銀河をつかつて発電所もつくれ

いまだに「サキノハカ」の意味は不明だが、ともかく「ブルジョアジーでもプロレタリアートでも」というように、階級で区分する見方をしていない。どちらにもいる否定すべき「卑怯な下等なやつら」という共通項に焦点を合わせているばかりだ。

否定すべき対象を羅列する第八行から第十一行をまとめて「そいつらみんな」と呼ぶのだから、「その中から卑怯な鬼どもを追い払う」というのは、さらに幾人かを選別するというのではなく、そのような「やつ」「やつら」の内部に巣くっている「卑怯な鬼ども」なるものを「追い払へ」ということである。その意味ではどこまでも個々人のあり方によって議論をし、社会階級に焦点を合わせた階級闘争主義的運動論は選ぶところではなかったのだらうと思わせる。しかも、賢治が展開した羅須地人協会の運動が、一定の組織としての形態や拡がりを築くに至るには余りに短い期間での中絶に終わってしまったのであった。

宮沢賢治が向き合った大正末期から昭和一桁の農村の現実について、大局的な枠組みを石堂清倫がその著『20世紀の意味』（平凡社、二〇〇一・七）のなかでこう記していた。昭和六年の満州事変を重要な転機として捉え返し、その前後に「窮乏のなかで革命化しようとしていた農民」に対して、軍部は大宣伝運動を展開し「日本における人口過剰と土地狭小の現状では、たとえ土地分配を実行しても零細所有に変わりはなく、空しく餓死するよりは、満蒙の沃野を入手する方法をえらぶ」、「そうすれば、農家は一躍して十町歩の地主になれる」と扇動したが、「自由主義者も左翼も、この悪扇動に反対するものはなかった」、本来は「人口や土地の問題から対外侵略をひききだすべきでなく、国内改革によって新しい生活をひききだすべき」であったが、「露

骨な満蒙侵略論」が世論になっていった、と厳しく振り返っている（Ⅱ 転換を果たせなかつた世紀）冒頭の「愛国主義から排外主義へ」。

先に見たように、昭和六年の賢治はすでに最後の病床に就いていたが、再び立つことができたなら「農村を／最後の目標として／只猛進せよ」と自らを戒めていた時でもあった。

最晩年、召集されて満州に派遣されていた伊藤与蔵にあてた昭和八年八月三十日付の書簡が残されているが、そのなかに「この三年の間の世界の転変を不思議なやうにさへ思ひます。」とも記しながら、新聞報道に見られるようないささか紋切り型の言い回しが交えられていることを捉えて、そこに賢治の戦争支持思想が現れていると指摘する議論もあった。しかし、伊藤は羅須地人協会設立時のメンバーであり、昭和三年の第一回普通選挙の際に、賢治に誘われて労働党の泉田三郎の選挙演説会場に同道したことがある人物であつて、今は満州派遣歩兵第三十一聯隊第五中隊にあつて病床の賢治に見舞いのたよりを寄せてくれた、その伊藤への返信である。手紙の内容や書き方にも注意深い読み取りが必要なのである。これに関しては、かつて「手紙の読み方―伊藤与蔵あて宮沢賢治書簡について―」（実践国文学）五十三号、一九九八・三）で触れておいたが、賢治の農村の現実に対する改革への願いの持続こそが認められるべきだらうと考えている。

さらに、近隣諸地域、諸民族への植民地主義的態度や、その

結果として生ずる差別や蔑視に対して、賢治が強い批判と、その犠牲を強いられた人びとの境遇に深い同情の思いを抱いていたことは、最晩年の「文語詩稿 五十篇」の冒頭に残されていた（「いたつきてゆめみなやみし」）（その下書稿「鼓者」）、それから弟清六がその題材の背景を記した「思ひ出」（宮沢賢治研究『十字屋書店、一九三九・九』、および、それを論じた小沢俊郎「太鼓のリズム」〔賢治研究』一九七八・六^⑧〕）によれば理解出来ることと思う。町をゆく飴売りの太鼓の優れたリズムから、その人の民族の歴史「高麗の軍楽」を偲び、その同胞を含めて、「異の邦」で、放浪したり、下層労働者としての過酷な境遇に置かれて、打ち棄てられる人びとの有様に胸を痛めないではない、大きな眼差しがそこにはある。この意味で、少なくともこの時期の現実には即して賢治が単純に戦争支持思想を表明することはあり得ない。むしろ、石堂清倫が、『20世紀の意味』のなかで、繰り返し日本近代の歴史における「排外主義」「排他的性格」の形成と罪を取り上げ、その課題の克服の重要性を主張して、「諸国民の相互尊重にもとづく共生の路」を求めていることと響き合うべき側面だろうと思う。

石堂清倫は、「詩人の言語」で、「詩人の言語」が持つ重要な意義を展開しているが、そのなかで、宮沢賢治の名前を花巻の通信で見る以前に知っていたことを「宮沢の名はわれわれ仲間ではほとんど知られていなかったが、たまたま私が知っていたのは、『春と修羅』を持っていたからである。神田神保町に田

村書店という古本屋があった。主に文学書を扱っていてなかなかよい本屋であった。私はそこで変った書名にひかれてこの詩集を求めたのであった。」と説明している。だが、この文中には含まれなかったが、栗原あての最初の書信のなかには、花巻の通信員の通信に賢治の支援が記されているのを見た時「当時私は彼が詩人であること、その作風がプロレタリア詩人とはちがっているが、こうした人は大切にしたいと通信員にたのんだのでした。」とも記されてあったのである。

三・二五事件での石堂の検挙、「ひかりかゞやく青空のした労働党は解散される」時代の状況は、石堂のこのような懐の深さ、認識の広さが実際の運動のなかに実現することを許さなかったが、その姿勢は長い経緯の後の著書『20世紀の意味』での「新しいアソシエーション」への展望と、提唱にまで続くものだった。その意味で、宮沢賢治の可能性もまた、生きて現在にまで引き継がれているものに他ならないのである。

先にも引用した「雨ニモマケズ手帳」のその先、七九頁と八〇頁には、「くらかけ山の雪」で始まる未完の詩句が書きかけられたまま残されていた。

くらかけ山の雪

友一人なく

たゞわがほのかにうちのぞみ

かすかなのぞみを托するものは

麻を着

けらをまとひ

汗にまみれた村人たちや

全くも見知らぬ人の

その人たちに

たまゆらひらめく

第二行「友一人もなく」と書いて「も」を渦線で抹消。次の行に「同志一人もなく」と書いて、縦線を引いて抹消。第七行は初め「村人たちの汗にまみれた」と書いて「村人たちの」を縦線で抹消。第八行末尾の「や」は、初め「の」と書いて、上書きして「や」に直し、最後の行の半ば左に「純」と書いて渦線で抹消して、そのままに終えている。

二度目の病床にあつて、いったい「たまゆら（＝一瞬）」ひらめく何に「のぞみ」を托す思いがかけられていたのだろうか。残念ながらその内容を確定することは不可能に近いかも知れない。しかし、「友」も「同志」もないと見定めた場所で、「ひらめく」ものを背負う者として思い描いた「わが」「かすかなのぞみを托するもの」が、働く普通の「村人たち」や「全くの見知らぬ人」であったこと、最晩年に向かう宮沢賢治にとって、彼のアイデンティティの「他者」、「共生」の対象が、そのような「村人たち」であり、「人たち」であったことだけは、書きかけのままに確かに伝わってくるのである⁹⁾。

注

1 「回想 恩田逸夫と宮沢賢治」〔宮沢賢治論1〕八一・一〇、東京書籍）の中で小沢自身が恩田を評したことば。

2 拙稿「小倉豊文の宮沢賢治研究」『実践国文学』七十八号、二〇〇七・一〇。

3 清沢満之が暁鳥らの門下生と結んだ浩浩洞の最初の拠点は近角常観が欧州への宗教制度視察中に借りた求道学舎だった。近角との縁は賢治の母方の叔父たちとの関わりでも知られていたことではあるが、近年、近角と求道学舎の調査が進む中で、政次郎や賢治妹トシの書簡が掘り起こされるなどを通じて、より具体的に精度の高い、かつその時代における思想的拡がりの実体の検証に資する可能性を深めて、岩田文昭『近代仏教と青年 近角常観とその時代』（岩波書店、二〇一四・八）や碧海寿広『近代仏教のなかの真宗近角常観と求道者たち』（法蔵館、二〇一四・八）などで報告されるに至っている。

さらには、安藤礼二『折口信夫』（講談社、二〇一四・一一）の中にも、興味深い事項が種々見出された。例えば、暁鳥敏と西田幾多郎、鈴木大拙の交流には深いものがあるのは、大筋においてはよく知られた事柄のようではあるが、本書の中ではそういった大筋を一段と具体的に、精密に掘り下げ裏付けを深めている。例えば、「第二章 言語」における藤無染の周囲を掘り下げた部分に見られる、西本願寺派における高輪仏教大学の関係者や、キリスト教との関わりにおける理論的深化「万国仏教青年会」の国際的視野の拡がり等々に及ぶ言及など、さらには、その中に大沢温泉仏教講習会の講師として予定されていたこともある楠原龍誓のことが詳しく注されていることにも多くを教えられた。

なおまた、明治二十年代には「想像の産物だった」「新仏教」が三十年代に「実体化」されて行く形成と展開について、大谷栄一『近代仏教という視座』(ベリかん社、二〇一・二・三)の「第二章 明治期の「新しい仏教」の形成と展開——仏教青年たちのユースカルチャー——」が優れた総括的展望を提示して、有益である。

4 「謹みて橋本大兄に呈す」短歌五首・大正二年の作。『新校本宮澤賢治全集』第一巻および第十四巻・「写真献辞署名等」。

5 賢治は家督相続人としての実質的位置を外れるような選斥をすることになるが、戸籍上の変更は伴わなかったわけであらう。厳しかった父政次郎との微妙な結びつき(繰り返し衝突し合)ながら、互いに認め合う)がここにも見られる。

6 のち「わが友中野重治」(平凡社、二〇〇二・四)に再録。

7 鈴木貞美『宮澤賢治 氾濫する生命』(左右社、二〇一五・八)にも触れるところがあるが、そこには「賢治のいう「労働党」は一九二六年一〇月三一日に発足した日本労働党種和支部のこと」というような誤りが含まれている。無産政党のヘゲモニー争いやそれに伴う各種団体の設立には注意が必要である。もちろん、賢治が伊豆大島に訪ねた伊藤七雄は日本労働党に所属したというから、日本労働党とも接点があり得なかったわけではないと思われるが、賢治が詩篇「高架線」(『東京ノート』)の中で言及した「ひかりかがやく青空のした／労働党は解散される」の場合は三・一五事件後に行われた四月一〇日の「労働農民党・日本労働組合評議会・全日本無産青年同盟」の「解散命令」をふまえたものであることが明らかである。これについては、拙稿「労働党のこと」(『賢治研究』二二八号、二〇一六・三)、「続」労働党のこと、など(『賢治

研究』二二九号、二〇一六・七)で詳しく説明したので参照願いたい。

8 のち、『小沢俊郎宮澤賢治論集』3(有精堂出版、一九八七・六)に再録したが、「解説」のなかで、背景となつたかもしれない当時の新聞記事の事例を補っておいた。

9 終生、宮澤賢治を敬愛して止まなかった吉本隆明が、知識人の「自立」は、(大衆の原像)を鏡として、それと向き合い、続けなければ維持されないとして弁証の原拠とし続けたことは、これに重なるものだと私は思っている。

「付記」なお、本稿は、拙稿「(詩)の導き——重治・清倫・賢治——」(『梨の花通信』二〇一七・二)を組み替え、修訂増補したもので、内容的に重なるところがあることを申し述べておく。石堂清倫さんの栗原あて書簡の内容については、前稿の方が詳しく紹介している部分があるので、併せて参照いただければ幸いです。機会を得て、書簡全文を紹介したいと考えている。